

【エントリー情報】

学校名：石川県加賀市立庄小学校

ご記入者：野田美由紀

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。

(1,500文字以内) ※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

(1) 本校の目標

「行きたい 行かせたい 行ってみたい学校」

～子どもも教師も幸せになれる ウェルビーイングが実感できる学校～

キーワードは「自分から 自分たちから」

(2) 研究主題

「進んで自分の学びを深め、学びの楽しさを実感する子の育成」

～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた授業づくりを通して～

(3) 児童の実態

本校児童は、素直で決められたことには真面目に取り組むことができるという良い面がある一方、自ら課題意識をもち、解決に向けて挑戦していく姿勢の弱さが課題としてある。さらに少人数の集団とはいえ、多様な子どもが教室には存在している。

(4) 昨年度までの取り組み

私たちの住む加賀市は「BE THE PLAYER」ということで、市内全体で子どもたちを「自律した学習者」にするというビジョンを掲げている。本校でも昨年度から2名の教師が、授業の一部で子どもに委ねる授業に挑戦していた。思ったより子どもたちは自分で課題解決に向けた行動をしようとしていたものの、わからなくなるとすぐに教師を頼って聞きに来るか考えることをあきらめてしまうという実態があった。

(5) 本校教員の実態

本校では担任の75%が20代という若手教員が大部分を占めている。日々悩みながら手探りで教材研究をし、授業をしている。一方で何事にもチャレンジする柔軟な面があり、授業ではICTを積極的に取り入れる姿勢がある。このよさを存分に生かしたいと考えた。特に、ミライシードを活用した授業づくりは定着しており、その強みを生かした授業改革をしていくことにした。

(6) 授業づくりに対する意識転換

私たちはこれまで「みんな一緒に、同じことを、同じ方法でやる一斉授業」が当たり前だと思ってきた。しかし、そのような授業は誰一人取り残さず、一人ひとりの力を伸ばすものになっていたのかというと、必ずしもそうではなかった。自律した学び手を育てるために、私たちの授業づくりの意識を根本から変え、「どう教えるか」から「子どもがどのように学ぶか」へと転換する必要がある。職員で共通理解したことは以下のことである。

- ・少人数ゆえに手厚く支援したくなるが、子どもが試行錯誤して課題解決することを奪わない。
- ・困った時にどうすればよいか考えて、自ら行動できる力をつけさせる。

・まずは自分で考え、必要ならば友達と相談したり情報を集めたりさせるが、そのタイミングや相手は子どもが決める。

・タイマーで子どもを管理しない。

・これから生きる子どもたちだからこそ自己調整力を育むことが大切。

1 学期はまず、1 単位時間の中でこのような場面を意識して設定し、子どもに委ねる授業に全員で挑戦してきた。

(7) 単元内自由進度学習に取り組むにあたって

本校の教員の何人かは自由進度学習の先進校へ視察をした経緯があり、挑戦してみたいという思いをもっていた。今年度は市の研究指定校になり、東京学芸大学佐野亮子先生にご指導いただけることにもなった。年度当初は、中学年以上から取り組んでみるという意見もあったが、うまくいなくてもいいから全学年でやることで校内の一体感も生まれるので、学校全体で「自律した学び手」を育てるためにも、1 年生から挑戦してみることにした。子どもたちに始業式から言い続けている「自分から」のキーワードにもぴたりである。教員には「うまくできなくても、かっこいいものでなくてもいい。やってみることに価値がある」ことを伝えるとともに、教材研究などの時間を生むための日課変更などを行った。

また佐野先生の「子どもが自分の人生を自分で成功させるために」という言葉が私たちの心に刺さり、そのような教育をめざしたいという思いになった。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。（1,500 文字以内）

本校は若手教員が多く、授業づくりに悩んでいるが、大きな授業改革をしていくには、先入観なく柔軟に対応できる若手教員ゆえに活躍できるはずである。また、ICT に長けた教員が多く、それも強みになる。そう考え、授業改革を次の 2 点で進めることにした。

1 点目は単元内自由進度学習への挑戦、2 点目は ICT の効果的活用である。

(1) マイプラン学習（2 教科同時進行単元内自由進度学習）について

2 教科の 1 単元ずつを 1 つのユニットとし、子どもたちが自分でプランを立て学習を進めていく学習スタイルであり、本校では「マイプラン学習」と呼んでいる。詳しくは以下のとおりである。

・全学年、学期に 1 回実施

・自分のプランに沿って進めていくので、学習進度が児童によって異なる

・児童が自立した学び手として自分で学習を進めていけるよう、教師は「学習の手引き」「学習カード」を作成するとともに、学びの環境づくりも行う

進めていくにあたって、市に配置されている「学びの伴走者」であるプロジェクトマネージャーに授業づくりの相談にのってもらうことにした。また、教員が協働的に教材研究できるよう、全学年算数の図形領域を軸に取り組むことにした。

(2) 保護者への理解

保護者の理解を得るため、10月に授業公開と保護者説明会を実施した。子どもたちが生き生きと学びに向かい、保護者がいても集中して学習する姿、1年生であっても端末を使いこなす姿に誰もが驚くとともに、大きな理解を示され応援をいただいた。



(3) 中学校との連携

中学校では、子どもに委ねる授業形態に慣れた子どもたちが入学してきた際、学びの段差がないよう授業改革を進めていきたいということであった。そこで、夏季休業中に小中研究主任同士で情報交換したり、中学校の国語科担当教員との学習会を行ったりした。10月には中学校校長をはじめ多くの教員が「マイプラン学習」を参観し、その後それぞれの教科において「子どもに委ねる」授業づくりのヒントにしたとのことだった。ICTの使い方にも感銘を受け、複数の教科でチャレンジし、実際の授業では生き生きと学ぶ生徒の姿が見られたということだった。

(4) 他校、他市、他県との連携

10月の「マイプラン学習」は研究発表会ではなかったが、多くの問い合わせがあり、急きょ1週間授業公開とした。参観する際には、自由に子どもや教員に話しかけてもよいことにし、設置の教材も撮影可能にした。公式な発表会ではないものの、市内・市外から多数の参観者があった。また、沖縄県恩納村教育委員会からも視察があり、本校の取り組み



に大きな理解を示され、次年度より村内全小中学校で取り組むことにしたとのことである。今後校長と研究主任、校区中学校教員が恩納村全小中学校教員に研究の説明をすることになっている。

(5) 課題

①教材の質

事前の教材準備が命のマイプラン学習。学習がしんどい子が自力で学べるよう丁寧な準備をしていくが、実際の児童の様子を観察すると、手立てが十分でないために学びが止まっていたり、指示がわかりにくいことがあったりした。また、発展問題の質についても改善の余地がある。児童が確実に資質・能力を身につけ、学びの楽しさを実感できる教材開発をし、ICTのさらなる効果的活用と合わせて進めていく必要がある。

②環境づくり

児童観察から、教材の設置場所や設置の仕方次第で、子どもの興味関心や動きが大きく変わることがわかった。子どもの立場に立った意図的効果的な教材設置、環境づくりをしていく必要がある。

③ **(3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。(2,000 文字以内)**

子どもに委ねる授業を進めていくには、学習内容や学習方法、交流するタイミングや交流相手を子どもに判断・選択・決定させる機会を増やすことが大切である。その実現に ICT の活用が不可欠である。

(1) GIGA 推進リーダーによる校内研修会の実施

本校には、GIGA 推進リーダーが 1 名いる。教員からリクエストが挙がったら、ICT 支援員のサポートを受け、タイムリーな校内研修会を実施している。その中で教員から最も授業改革につながったと言われたのは、オクリンク研修会と Q R コード作成研修会、解説動画作成研修会であった。1 学期の早い段階で実施したことで、全学年が授業で効果的活用をすることができ、もはや子どもに委ねる授業の実現に端末は必須となっている。

(2) 単元計画やつけたい力の共有

子どもが自立して学び、自己調整力を働かせていくには端末は欠かせない。新しい単元に入る際には、単元でつけたい力や学習の流れを子どもと共有し、見通しをもたせている。何もわからず学習をするのではなく、何のために学ぶのか、何を学ぶのか、どのように学ぶのか、学んだことでどう成長するのかを自覚することが大切であり、自立した学び手になる第一歩である。これらの情報を端末のクラスルームに入れて活用している。



(3) 個への支援

端末には、子ども一人ひとりの興味・関心、学習の仕方に対応できる教材の準備、文章や図だけでは理解しにくい子のための教師作成の解説動画、様々な情報へアクセスするためのリンクを入れてある。またヒントや動画を見る Q R コードも準備している。子どもは使いたいタイミングで、何度でも、どこでも使うことができる。特に、担任が作成した解説動画は、担任の先生がいつもの語り口で説明してくれるので、子どもたちは安心して何度も見ることができ好評である。一斉授業では聞き漏らしがある子でも、自分の必要な場面で何度でも視聴できるので、より主体的な学びにつながっている。

(4) 振り返りの充実

自己調整力を働かせるには、振り返りが大切である。特にマイプラン学習では、自分の学び方がどうであったのかを振り返り、次時の学習へつなげていくことが重要であり、自己調整力の育成にもつながる。端末には単元計画と一体化した振り返り欄を入れてあり、単元を通して自己の学びを見つめ

ることができる。教師に送信することでノートの提出も必要なくなる。また、授業の最初には、いくつかの振り返りを子どもたちに送信し、短時間で共有することもある。

(5) 評価の充実

オクリンクの活用により、児童の成果物、特に音読や朗読、楽器演奏などを録画して教師に送信することで、教師がその場で一人ひとりを見なくても評価できるようになった。また、児童同士で送信することで、児童間での相互評価ができる。

自由進度学習においては、個々が学習を進めていく途中で、習熟が図れているかをチェックするための「チェック問題」が用意されている。児童はチェック問題を解き、提出BOXに提出して、教師に見てもらおうとしている。自分の学びたい場所で学習しているため、わざわざ教師を探して評価をしてもらうことがない。さらに、高学年では、身につけた知識・技能をアウトプットする際に説明動画を作成して提出BOXに提出し、教師がチェックして合格であればスタンプをつけている。ほかの児童は、合格した児童の説明動画を見ることができるので、合格したものはどこが優れているのか、自分はどこが不十分なのかを自ら分析し、修正して再提出する姿が見られている。

特別支援学級では、1人の在籍であるため、いつも対教師の評価であったが、普通学級の児童に送信することで、コメントをもらったり、アドバイスをもらったりして、学びが孤立化しないことにもつながっている。



それぞれの場所で学習しているから、教師は端末で学習の進捗状況を把握

(6) 自己調整力の育成

マイブランチ学習を進めていくにあたり、教師が作成した「学習の手引き」（単元計画や単元目標、学習内容が書かれたもの）2教科分がクラスルームに入っており、児童は自分で学習計画を立てていく。また、「学習カード」と呼ばれる学習教材が端末に入っており、自分の立てた計画に沿って学習カードを使いながら自分で進めていく。児童自身が端末の学習の手引きや振り返りを見ながら、進捗状況をモニターしていくことで自己調整力が育まれている。

(7) 教材準備の効率化

個の興味・関心、学習のスピード、能力に合わせた教材を準備するとなると、これまでは時間をかけて印刷をしていたが、ICTを使えば端末に写真や教材を送信するだけでよくなる。多様な教材の準備も苦でなくなり、子どもにとっても選択の幅が広がる。自分で判断・選択・決定がデフォルトになっている。



教師が作成した解説動画を見る児童

(3-2)ICT 活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。(1,500文字以内文字以内) ※本設問のみ任意回答

令和5年12月にICT活用についてのアンケートを児童(1~6年)、教員にとつた。結果は以下の通りである。

【児童】

Q：マイプラン学習を進めるにあたって、タブレットパソコンはなくてはならないと思いますか。

A：とてもそう思う52.9%、そう思う35.3%というように、肯定的意見が88.2%となり、約9割の児童がなくてはならないと感じている。

Q：マイプラン学習で、自分で問題を解決していくとき、タブレットパソコンに入っている解説動画やヒントカードは役に立ちましたか。

A：とてもそう思う58.8%、そう思う25.9%というように、肯定的意見が84.7%となり、約8割の児童が役に立ったと感じている。

Q：マイプラン学習で、タブレットパソコンを使い、自分で動画を作ったり、友達と見合ったりしたことは、力をつけることにつながっていましたか。(3年以上が回答)

A：とてもそう思う47.4%、そう思う45.6%というように、肯定的意見が93.0%となり、約9割以上の児童がなくてはならないと感じている。

【教員】

Q：ICTを使うことで、授業や提案などの準備が以前より早くなりましたか。

A：とてもそう思う57.1%、そう思う42.9%というように、肯定的意見が100%となり、ICTのおかげで授業準備の負担が減っている。

Q：ICTを使うことで、よりねらいを達成できるようになりましたか。

A：とてもそう思う85.7%、そう思う14.3%というように、肯定的意見が100%となり、ねらい達成にICT活用が必要不可欠であると感じている。

Q：ICTを使うことで以前より身につけたい力をより確実なものにできたと思いますか。

A：とてもそう思う57.1%、そう思う42.9%というように、肯定的意見が100%となり、ICT活用によって活用する以前よりも、子どもに確実に身につけたい力をつけることができていると感じている。

以上のように児童、教員両方にとって、ICTの活用に有効性を感じているという結果が出ている。

また、図形領域における学力を図るため、単元末テストの到達率を1学期と2学期で比較した。

1学期図形領域(一斉授業)の到達率80%以上が全校の67%、80%未満が33%、

2 学期図形領域（自由進度学習）の到達度 80%以上が全体の 87%、80%未満が 13%となった。

その中でも 1 学期に 80%到達できなかった児童 33%を取り出して分析したところ、その中の 73%が 80%に到達しているほか、2 学期に 80%に到達できなかった児童においても到達率の伸びが見られている。

④ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立つ場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000 文字以内）

本校で一番活用しているのはオクリンクであり、オクリンクの活用が授業を変えたと感じている教員が多い。特に活用した機能は以下のとおりである。

（1）カード機能

①学習の手引きと学習カード

マイプラン学習では、子どもたちが単元に入る際に学習計画表を提示する。全員が必ず取り組む学習内容と自分で決めて自由に取り組む学習内容（チャレンジ問題と呼んでいる）を設定し、学習方法も選択できるようにしている。本校では全学年で 2 教科同時進行単元内自由進度を行っているため、2 教科分の学習内容、指示、ワークシート、チェック問題などをカードにしている。教師が指示しなくても、学習カードを自分で見て学習を進めていけるので、この機能は自律した学びにはぴったりである。

②解説動画での活用

カード機能の便利な点として、動画の貼り付けの簡易さが挙げられる。子どもが自分で学習を進めていくうえで、あらかじめつまずきが予想されるところがある。その場合、教師が解説動画を録画し、学習カードに貼り付けておくことで、必要な子が必要なタイミングで何度も見ることができている。一斉授業ではおいていかれがちだった子が、自分で解説動画を何度も見て理解していくことができている。逆に、子ども自身が説明動画を作成し、貼り付けて提出することで、教師はその場にいなくても評価することができる。子どもにとっても簡単に発表資料を作ったり、撮影したものを貼り付けたりすることができる点で大きなメリットを感じている。

③指導の個別化と学習の個性化

さらに、個別最適な学びを進めるにあたって、指導の個別化と学習の個性化を大切にしている。指導の個別化として、一人ひとりの特性・学習進度・学習到達度に応じてその子に合ったやり方で学習が進められるよう、複数の問題や方法をカードで提示することもある。子どもは判断・選択・決定して学びを進めることで、自己調整しながら力をつけることができている。学習の個性化として、マイプラン学習のチャレンジ問題では、個々の興味・関心などに応じた学習活動ができるよう、カードに学習活動や課題を提示し、それぞれが自分で選んで学習できるようにしている。

このように、自己調整力と自己決定力を育成するためにもこのカード機能は有効であると感じている。

(2) 提出機能

①学習進捗の提出

マイプラン学習では、子どもの進捗がバラバラになっている。子どもたちから、自分の課題解決のために誰と相談したらよいかわからなくて困るという意見が挙がったため、授業開始時に、自分が本時どこを学習しているか提出することにした。

②チェックテストの提出

また、個々の学習の定着状況を評価するため、学習の区切りごとにチェックテストが用意されている。チェックテストに挑戦し、提出BOXに提出することで、教師は即座に評価をすることができている。クリアできなかった児童は、自分で前の学習カードに戻り、自分で復習をして再トライすることができている。また、1、2年生はタイピングができないため、プリントを解いてカメラ機能で撮影し、その画像を提出BOXに提出する方法をとっている。

③説明動画の提出

本校の教師が大変有効性を感じているものとして、子どもが説明動画を作成し提出する使い方がある。自由進度学習では、ともすると自分の考えを声に出してアウトプットする機会が少なくなりがちである。そこで、子どもたち自身がアウトプットする機会を自由進度学習の中に入れ込み、説明動画をそれぞれが作成して教師に提出することにした。例えば、5年算数の平行四辺形の面積の単元では、ある程度学びを進めてきた段階でチェックテストとして「平行四辺形の面積の求め方を説明しよう」という課題を設定した。子どもは、図を示しながら求積方法を説明し、録画したものを提出し、教師に合格をもらうというものである。実際の子どもたちは、「ユーチューバーみたい」といいながらアウトプットを楽しみつつ、なかなか思うように説明ができないので、「わかったつもりになっていたけれど、自分で話してみるとあやふやなところがあるってわかった！」と言って、前の学習に戻る姿が見られた。このように、自分の理解を客観視し、確実な理解ができていないと自分で判断した場合には、不十分であった学習内容のところまで戻って何度も挑戦することで、自己調整力や粘り強さの育成につながっていた。



説明動画作成で
アウトプット

④1年生での活用

1年生でもこの機能を日常の学習でもよく使っている。算数では、教師がカード機能を使って問題文を送り、子どもは式や図、自分の考えを書きこんで提出したり、ノートなどをカメラで撮影して提出したりするなど使いこなしている。



マイプラン学習で
端末を使いこなす1年生